



Young Ophthalmologists Committee Hot Topics !



Instagram

Young Ophthalmologists Committee の 国際活動報告

日本眼科学会戦略企画会議第二委員会
Young Ophthalmologists Committee

海外留学と The 41st Asia-Pacific Academy of Ophthalmology Congress (APAO 2026)

YOCは、「日本の研究促進と国際化の加速」を活動理念に、若手医師を後押しする活動に取り組んでいます。第8回となる今回のYOCコラムでは、YOC委員の国際活動をご紹介します。はじめに、福津佳苗先生(北海道大学)のSingapore Eye Research Institute(SERI)/Singapore National Eye Centre(SNEC)での留学、続いてAPAO 2026での活動、最後に羽入田明子先生(慶應義塾大学)のAPAO Leadership Development Programについて取り上げます。

福津先生の SERI/SNEC での留学体験談

福津先生は、2025年4月から1年間、SERI/SNECへ留学されました。SERI/SNECは、Singapore General Hospitalグループに属し、眼科研究所であるSERIと眼科専門病院であるSNECから成る組織です。福津先生は、SNECのサージカルレチナ部門責任者であるGavin Tan先生のラボに属しながらも、Daniel Ting先生、Leopold Schmetterer先生らの研究プロジェクトも担当し、foundation modelの構築を含むAI研究や、イメージングを用いた眼形態解析研究に従事されたそうです。また、臨時的医師免許を取得して外来診療にも携わり、臨床現場の仕組みについても多くを学ばれたとのことでした。福津先生のお話で特に印象的だったのは、SERI/SNECにおける研究支援体制の充実です。各チームにはCRC、データサイエンティスト、統計担当者などが配置され、同意取得やデータ管理を医師以外の専門職が担うことで、医師が研究そのものに集中しやすい環境が整っているそうです。加えて、グラントの規模も大きく、大規模研究を継続しやすい仕組みが構築されている点も特徴的でした。また、シンガポールでは研究現場と行政との距離が近く、国の政策に関わる研究が日常的に行われていることも大きな学びだったそうです。国土の小ささを強みに変え、

資金、人材、制度をうまく結びつけて研究を進めている点は、日本における研究支援体制や制度設計を考えるうえでも大いに参考になるように思われました。一方で、今回の留学は研究面だけでなく生活面でも大きな挑戦を伴うものだったそうです。ご主人が仕事の都合で帯同できなかったため、7歳と4歳のお子さんを連れての単身子連れ留学となりました。不安や苦勞も少なくなかったと思われますが、シンガポールではヘルパー文化が広く根付いており、生活面で支援を得やすい環境が整っているとのことでした。実際に、フィリピン人のヘルパーの方に支えられながら生活を成り立たせておられたそうで、研究と子育てを両立する姿は、多くの若手医師に勇気を与えるものと感じました。

留学というと、語学、研究実績、家庭との両立など、さまざまなハードルを思い浮かべる先生も多いかもしれませんが、しかし福津先生のご経験からは、留学は決して一部の特別な人だけのものではなく、準備を重ねて一歩踏み出すことで開ける現実的な選択肢であることが伝わってきます。新しい研究環境に身を置き、これまでと異なるシステムや価値観に触れることは、研究者としてだけでなく、臨床医としての視野を広げる貴重な機会にもなるはずです。若手の先生方の中には、いつか海外で学んでみたいと思いつつも、なかなか最初の一步を踏み出せずにいる方もいらっしゃるかもしれませんが、福津先生のご経験は、そのような先生方に留学をより身近なものとして感じさせてくれるのではないのでしょうか。研究面での成長はもちろん、異なる文化や制度の中で得られる経験そのものが、今後の診療・研究人生に大きな財産となることを改めて感じさせるお話でした。特に、育児と研究の両立に悩みながら日々奮闘している女性医師にとって、大きな勇気を与えてくれる内容であったように思います(写真1)。

YOC 委員の APAO 2026 での活動

続いて、YOC委員によるAPAO 2026での活動に



写真 1 福津佳苗先生のシンガポール留学の様子。



写真 2 APAO YO Speed Mentoring の様子。



写真 3 APAO Young Women In Ophthalmologistsの様子。

ついでご紹介いたします。今回のAPAO 2026には、YOCから羽入田先生、福津先生、大城綾乃先生(琉球大学)、船津 諒先生(鹿児島大学)、そしてYOCアドバイザーの田中 寛先生(京都府立医科大学)が参加されました。会期中は、若手眼科医の交流やキャリア形成を支援するさまざまな企画に参加し、国際的な視点から多くの学びを得る機会となったそうです。羽入田

先生、福津先生、船津先生が参加されたYO Speed Mentoringでは、テーブルを短時間ずつ回りながら、キャリアパス、教育、研究といったテーマについてメンターと率直な意見交換が行われたとのこと。国や世代を超えて、普段はなかなか聞くことのできない悩みや本音に触れられる、貴重な機会であったそうです(写真2)。また、福津先生が参加されたYoung

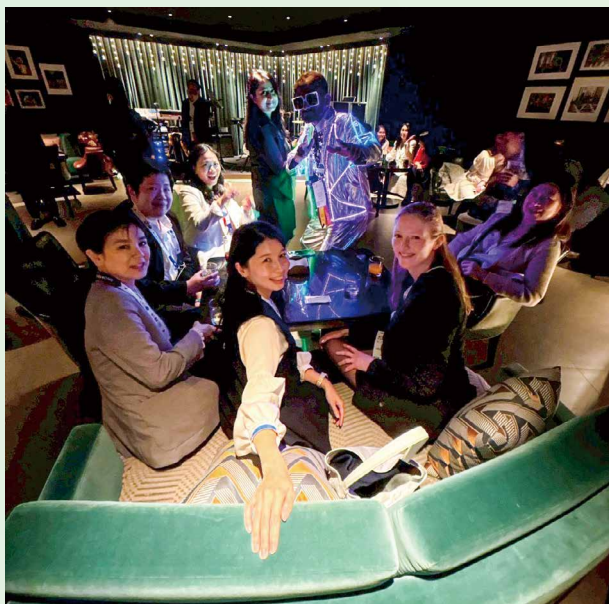


写真 4 APAO Young Ophthalmologists' Night の様子。



写真 5 APAO 2026 に参加した YOC 委員の先生方。



写真 6 APAO Leadership Development Program の様子。

Women In Ophthalmologistsセッションでは、女性医師として臨床・研究を行う上での課題やキャリア形成、各国の現状について活発な議論が行われたとのことでした。会場も盛況で、注目を集めていたそうです(写真3)。さらに、羽入田先生はAPAO Leadership Development Programにおいて研究成果を報告されました。本報告については、本コラムの最後にあらためてご紹介いたします。最後に、福津先生、大城先生が参加された Young Ophthalmologists' Night では、各国の Young Ophthalmologists と交流し、情報交換や親睦を深める機会となったそうです(写真4)。

今回の APAO 2026 への参加は、国際学会での交流にとどまらず、アジア太平洋地域における若手眼科医支援の取り組みに触れる貴重な経験となりました。各企画を通じて、若手眼科医のキャリア形成、研究、留学、ライフイベントとキャリア形成の両立といった課題は国を超えて共有されており、継続的なメンタリングや若手同士のネットワーク形成の大切さを改めて感じたとのことでした。

YOCでは現在、日本眼科学会総会および日本臨床眼科学会においてYOブースを設置し、留学、研究、キャリア形成などについて、若手眼科医を中心に意見交換

を行っています。APAO 2026で得られた知見や交流は、こうした国内での取り組みをより充実させるうえでも参考になるものと思われます。また、APAOで得られた国際的なつながりは、今後のYO Online LectureやJapan YOC-Leadership Development Programなどにおいて、海外のYoung Ophthalmologistsや国際的に活躍されている先生方の経験を共有する機会にもつながるものと思われます。こうした取り組みを通じて、APAOで得られた学びを全国の若手眼科医へ還元していくことも、今後のYOC活動を考えるうえで大切な視点になると感じました。このように、APAO 2026で得られた学びや国際的なつながりは、YOCの活動理念である「日本の研究促進と国際化の加速」を今後の国内活動に活かしていくうえでも、大きな示唆を与えてくれるものであったように思います(写真5)。

羽入田先生のAPAO Leadership Development

■ Program 参加体験談

最後に、羽入田先生によるAPAO Leadership Development Programでの活動報告をご紹介します。本コラムを締めくくります(写真6)。

羽入田先生は、日本眼科学会の推薦を受け、2025年度アジア太平洋眼科学会(APAO)主催のLeadership Development Program(LDP)に参加されました。APAO LDPは2009年に開始され、本年度で第14期(2025-2026)を迎える歴史あるプログラムです。2025年度は、アジア太平洋地域23か国より若手眼科医が集い、年間3回の集中ワークショップを通じて、リーダーシップの醸成に加え、国際的ネットワークの構築および組織マネジメントに関する実践的な研修が行われました。羽入田先生もこれらのプログラムに参

加されました。プログラムは、2025年4月にAPAO 2025(ニューデリー)にてオリエンテーションクラスとして開始され、同年8月には台湾にてMaster Classが開催されました。最終的に、APAO 2026(香港)において各参加者がプロジェクト成果を発表し、研修を修了いたしました。羽入田先生のプロジェクトでは、「アジア太平洋地域におけるロービジョン患者に対する持続的支援システムの構築」をテーマとし、慶應義塾大学病院におけるロービジョンケアハブの取組みとパイロット研究の成果が報告されました。本プログラムを通じて、各国のLDP参加者との密な交流を図ることで、各地域における眼科医療の特性や課題を学ぶことができ、その課題解決への糸口を多角的視点から俯瞰する国際的視点を学ぶかけがえのない機会を得ることができたとのことです。今後は、本プログラムで築いた同世代の国際的ネットワークを活かし、日本眼科学会YOCのさらなる国際展開に資する活動へと還元していきたいとのことです。

最後に、このような貴重な機会を賜りました日本眼科学会理事長 西田幸二先生をはじめとする常務理事会の諸先生方、日本眼科学会会員の皆様、慶應義塾大学医学部眼科学教室 根岸一乃教授、栗原俊英准教授をはじめとする同窓・教室員の先生方、ならびに2024年度LDP参加者の九州大学医学部眼科学教室 村上祐介先生に対し、羽入田先生より深い謝意が示されました。

YOCはホームページ・Instagram・LINEでも活動報告や今後の企画などのご案内を行っております。下記のQRコードよりご確認くださいませと幸いです。引き続きご支援・ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

(文責：加藤喜大)

